コラム

フィールドワーク覚え書き

●清水　透（慶應義塾大学教授）

2001年９月16日，その日はメキシコの独立記念日であった。深夜におよんだチャムーラ村での祭りの調査を終えて，サン・クリストバルの町の常宿へ戻って間もない頃だ。宿の中庭にインディオを満載した小型トラックが入ってきた。しかし，町のホテルにインディオが泊まるはずがない。こんな夜にどうしたことか？何かあったな，と嫌な予感がした。案の定，血だらけのフアニートが，従兄弟たちに抱えられるようにして，駆け寄ってきた。

1979年以来，私の研究はチアパス州のチャムーラ村の一家族ロレンソ一家との付き合いに支えられてきたが，フアニートはその一族の若手ホープである。一人息子だった彼は，幼い頃に父親（ロレンソの長男）を病気で失うが，その後，飲んだくれと再婚した母親は，村の掟を破ってプロテスタントに改宗し村八分に遭う。一人残された彼は，祖父母のもとに引き取られたが，教育熱心な祖父ロレンソに支えられ村の小学校を卒業し，さらには町へ出て中学・高校を自力で終える。そして今では，村の教育を取り仕切る教育委員の一人となった。26歳の若手ながら，政府筋に認められた立派な村のエリートである。

その日彼は，小学校で開かれる独立記念祭の冒頭で演説をするという。だから，是非見に来て欲しい。できれば写真も撮って欲しい。主催者の彼の願いだ。しかもこれは，ようやく村に定着し始めた国家の祭りを観察できる絶好の機会だ。私は早朝に宿を後にし，村の学校へと勇んで出かけていった。主賓席に招かれ，村の慣習にしたがって校長や教師たちと地酒のポッシュを酌み交わす。学童全員に鉛筆をプレゼントする。照明のための電球も，自腹を切って学校に寄付した。父兄の村人たちとも，半数以上は既に知り合いの仲だ。これまでの調査の時と同様に，その日もすべて問題はなかった，と思い込んでいた。

確かにこの村も，1994年のサパティスタの蜂起を契機に，激変の時代を迎えた。村長はもはや伝統の象徴ではなく，行政官としての色合いが濃い。村長の奥さんは，ツォツィル語を知らず，ハイヒールにワンピース姿の完全な町育ちの女ラディーナだ。祭りに集まる女たちの間にも，パンストにハイヒール姿が目につき始めた。そして何より，かつてはPRI一色だった村のあちこちに，サパティスタやありとあらゆる政党の宣伝文字が現れ，プロテスタントの教会すら建ち始めている。プロテスタントに対する暴力的な追放が行なわれていた10年前からするなら，まさに想像を絶する光景なのだ。いわば村は，液状化現象の真っ只中にあり，それだけに私は，ここ数年の調査には，かなりの神経を払ってきたつもりであった。しかしただひとつ，私が見過ごしていた問題があった。「伝統」が大幅に後退し始めたとはいえ，村の末端の行政には，カルゴ・システム（役職者制）の伝統が根強く残っていたのだ。国の教育制度にも，村は村で，教育委員とは関係なく，独自の役職者を任命していたのである。

思えば，祭りの最中に一人，アル中の酔いどれが意味不明のことばを吐きながらしつこく纏わりついてきた。祭りではよくあることと，適当にあしらったのが，実は事件の発端であった。あの他所者は俺様に挨拶もせず，酒一杯注がなかった！そんな他所者を村の祭りに呼ぶとは何事か！祭りが終わり村人の姿が消えた暗がりで，伝統派の面々がフアニートを襲ったのである。

「わたしは渡し舟　あなたは行人　あなたは泥足でわたしを踏みつけました」

父親のように私を頼りにしてくれるフアニート。その彼の傷の手当てをしていると，どこかで目にしたこの一節が，ふと，苦く私の胸をよぎった。この村に拘り続けて22年。熟知していたはずの村だ。しかし，フィールドワーカーである限り，「行人」となり得る危うさをつねに抱えているということを，改めて思い知らされた一件であった。